多民族国家が抱える移民問題
―フランスの現状を事例に―

外国語学部フランス語学科 3 年　本武　彩

はじめに

2007 年 5 月、フランスで 5 年ぶりとなる大統領選が行われ、ニコラ・サルコジ党首がフランス大統領に就任した。フランス語学科に在籍する私はこの大統領選の動向を追う中で「フランスにおける移民問題」に強く興味を持ち、サルコジ大統領の「無差別の移民流入を規制しフランスの経済需要に合致する移民の受け入れを促進させる」という公約がどういう背景から成り、またどんな意味を持つのか知りたくなった。今日、一つの国に多民族が共存することは珍しくない。しかし、多文化が共存することによって、様々な問題が生じてしまうのもまた事実である。ヨーロッパ・EU においては、本論文のテーマである【移民】によって問題が一層複雑なものになっている。1990 年のシェンゲン協定、1993 年のマーストリヒト条約もその複雑化を助長していった。人は様々な理由で移動する。特に生活の場を求めて、永住を決意して移動する際には、受け入れ国の社会と母国文化の相違などから、様々な問題が起きてくる。民族差別などが存在しないのが理想だが、異なる民族、文化、習慣をもっている人々が、同じ社会で共生することは、実際容易なことではない。本論文では、フランスの移民問題から垣間見える多文化共生という難しい課題を、人々が多文化共生をするにはどのような政策が必要か、また個人の意識を変えるにはどうしたら良いのかを、特に労働、教育、という具体的な視点からフランスの現状を探り、フランスの新しい移民法にも触れながら考察していく。(本論文で移民とは、フランス人とは文化の違いがとりわけ目立つマグレブ諸国からの移民に限定した)

参考文献

ジョリヴェ・ミュリエル著　「移民と現代フランス」(集英社新書 2003 年)
内藤正典著『もうひとつのヨーロッパ～多分化共生の舞台～』 古今書院 1996 年
2005 年下川ゼミ生　岩倉瑞希さん論文　「極右政党冒頭に見るフランスの移民問題」